

## 第三者意見

高崎経済大学経済学部教授

水口 剛 氏



トップコミットメントの中で岡藤社長は、「ルールや規制で縛るCSRから、自分の良識で判断して自由闊達に行動するという段階へ進んでいきたい」とおっしゃっています。私はふと「心の欲するところから従って矩(のり)をこえず」という孔子の言葉を連想しましたが、自らの判断で自由に行動した結果がCSRにつながるというのは、おそらくCSRの理想の姿でしょう。個々の従業員にCSRの考え方が根付いているということは、どんな企業にとっても重要ですが、商社のような業態では特に重要なことだと思います。なぜなら、取扱う商品やサービスが非常に幅広く、社会の持続可能性に関わるあらゆる問題に関係するといっているからです。現場の一人ひとりが考えて適切な行動をとるのでなければ、本社の集権的なコントロールだけでは、とても対応できないでしょう。また、温暖化対策や資源循環など、ビジネスを通じて貢献できる分野では、現場のアイデアや創意工夫と、実際にそれを担う人の熱意が鍵になります。

その意味で、カンパニーごとにアクションプランを策定して取り組むというCSRの推進方法は適切だと思います。また、本レポートで紹介されている各カンパニーのさまざまな「主要取組事例」にも勇気づけられます。ただし、このような報告スタイルは、常に「全体像が見えない」「都合のいいところだけ紹介しているのではないか」という疑問と背中あわせです。私たちは、企業活動を売上高や利益などの統合数値で把握することに慣れているからです。しかし、CSRとは統合的な数値で表せるものではありません。一つひとつの取り組みという事実の積み重ねによって信頼を獲得するしかないのでしょうか。

ただ、一方で網羅性という視点を持つておくことも重要です。すべての活動が温暖化防止や生態系保護などの特定の

トピックスとつながるわけではなく、業務の大部分を占めるのはルーティンの取引であると想像しますが、その全体を通して、少なくとも

社会の持続可能性に反することは一つもしていない、と確認するということです。本レポートに掲載されたサプライヤーに関するカンパニー別のCSR実態調査は、そのような網羅性のある調査の第一歩として高く評価できると思います。今後さらに視野を広げ、例えば生態系の破壊につながることはしない、非人道的兵器には関わらないなど、最低限これだけはしないという一線を決めて、カンパニーごとにすべての事業の棚卸しをしてみてもいいのでしょうか。岡藤社長も言われるように、良識に反するような事業は長続きしないのですから。

問題は、その一線をどこに引くかということです。本当に難しいのは、商売と社会とがぶつかったときに、そのぎりぎりのところでどういう判断をするか、ということです。まさに「誠実」という価値基準の具体的な中身が問われるのです。その点で、各カンパニーで開催したCSRワークショップは問題の共有と気づきの場として有効だと思います。また、ボルネオ島の熱帯林再生事業で植林ツアーに参加し、大自然に肌で触れたという経験も貴重です。社内の植林ツアーだけでなく、外部のさまざまなNGO/NPOと接点のある方も多いと思います。そういう複眼的で多様な価値を体現する人を社内できかに増やすかが、「自由闊達に行動するCSR」という理想を実現するための鍵ではないのでしょうか。

## ■ ご意見を受けて

多種多様なビジネスを世界各地で行っている伊藤忠商事では、CSRは本業の中で社員一人ひとりが実行すべきものと考えており、CSRアクションプランを基軸としたCSRの実践を目指して推進を図ってきました。ますます複雑化する国際社会において利益を上げ、持続可能な社会の実現に貢献する企業であるためには、事業活動に携わる社員一人ひとりが自由闊達に活動し、持てる力を最大限に発揮するための正しい価値観がとて重要となります。

その一方で、多岐にわたるビジネスを展開しているからこそ、ビジネス全体を俯瞰し、当社の事業活動が社会に及ぼすさまざまな影響を、プラス面マイナス面を含むさまざまな側面から常に棚卸しを行い、複眼的にレビューすることが重要であるとのこと指摘を受けたと認

識しております。社員一人ひとりが、担当するビジネスについて、社会の要請、多様な価値観、またコンプライアンスプログラムを踏まえて常にレビューし、正しい判断ができるよう、CSR意識を持った人材の育成を推進していきたいと思っています。

伊藤忠商事は、企業理念である「豊かさを担う責任」を果たし、社会から信頼を得る必要とされる企業であり続けるために、今後とも努力を続けてまいります。

専務執行役員  
CSR委員会委員長 赤松 良夫

